

# 中国共産党の人的構成の特質

—— その党風形成への意義 ——

とく だ のり ゆき  
徳 田 教 之

## はじめに

今から約20数年前、1930年代末から40年代にかけて、中国共産党が延安の洞窟に本拠を置いて抗日ゲリラ戦争を指導していたころ、世界のひとびとは「中国共産党」とはいったい何ものであるのかについて明確な知識をもっていなかった。ある人はそれを「農業改革論者」と規定し、あるアメリカ人は「武装したオクラホマの共和党员」であるなどと呼んだのである。しかし、このような外界のひとびとの生半可な、あるいは演出された評価にもかかわらず、1940年前後にはすでに中共指導者は、つぎつぎと新段階における革命運動の方向と方法を基礎づけるための、「マルクス・レーニン主義」に基づいた理論的著作を生みだしていた。そして、その後の中国の共産主義者の特殊な行動様式を形成する基盤となったいくつかの重要な「実験」がこのとき行なわれていたのである。

抗日戦争の終結後、中国共産党勢力の発展はひとびとの予想をはるかに上回るものがあつたし、1949年10月の中共の新政権誕生は、世界のひとびとに大きな衝撃をあたえたのである。1949年9月21日、毛沢東は民族主義的情熱をこめて、かれの指導した革命の意義を、「われわれは一つの共通の感覚をもっています。それはわれわれの仕事を人類の歴史に書きこむことであり、それは人類総数の4分の1を占める中国人がこのときから立ち上がったことを示すことです」(注1)と述べたのであ

る。ここから中国の新しい歴史が始まった。

この民族的な立ちあがりの中核的指導者としての中国共産党は、いかなる性格をもつものであるのか。それはどのような共産主義者であるのか。それいらい、多くの学者が中国共産主義のイデオロギー、革命戦略の系譜、その行動様式等についていろいろな視角からの接近を試みてきた。劉少奇は「毛沢東思想」を「マルクス・レーニン主義の理論と、中国革命の実践とを統一した思想であり、中国の共産主義であり、中国のマルクス主義である」(注2)と規定したのだが、「中国のマルクス主義」とはいったい具体的には何を示すのであろうか。

新政権発足後16年の年月が流れた。この間中国共産党の活動の内面にある多くの重要事実については、依然として不明なところがあるとしても、この問いに対する解答はしだいに明らかになりつつあるように見える。とくに、1958年いらいのいわゆる「三面紅旗」政策、および、1960年からの「中ソ論争」の激化過程を通じて、今や変質過程を進むソ連共産党のリーダーシップと中国共産党のそれとの間には鮮明な対照がみられるのである。1949年7月、当時ハーバード大学のリサーチ・フェローであつたベンジャミン・シュオルツ氏はある雑誌に小論をよせ、中国共産党の発展過程を分析したのち、毛沢東のリーダーシップの対ソ獨自性、革命根拠地の長期的な保持という歴史的経験の特異性に着目し、将来「ソ連と中共政権の間で

利益の衝突が起こった場合、中共政権はそれ自身の利益を追求するであろう」と結論したのであった<sup>(注3)</sup>。最近における中国共産党リーダーシップの諸傾向は、過去の革命運動において蓄積され、その中に沈澱してきた経験と観念が、新しい段階において拡大再生産されて現われてきたものとみられ、それはある意味では「毛沢東思想」における潜在的諸要素の定型化またはその極限的状况を示しているものとみることができるであろう。

(注1) 毛沢東、「中国人民政治協商会議第1期全体会議での開会の辞」、尾崎、浅川編訳、『毛沢東戦後著作集』、77ページ。

(注2) 劉少奇、「党について」、尾崎、浅川編訳、『劉少奇主要著作集』、第2巻、40ページ。

(注3) Benjamin I. Schwartz, "Marx and Lenin in China", *Far Eastern Survey*, July 27, 1949, p. 178.

## I 反乱と統治の二重的経験

44年の歴史をもち、1800万人の党員を擁するこの世界最大の共産党、しかも今日特異な社会主義建設方式とイデオロギーをもつこの中国の支配政党に接近する方法は、きわめて多角的に存在しうるであろう。現在、中共政権が置かれている状況もまたきわめて複雑である。そこにはイデオロギー、ナショナリズム、政治体制、近代化、工業化等々の諸要素が錯綜しており、中共のリーダーシップはこれらに対してすべて関係をもっているのである。

現代世界には基本的にはソ連と中国という二つの主要な共産主義の体制が存在している。両者は基本的なイデオロギー、権力の権威主義的傾向、政治的・社会的組織の全体主義的構造、社会主義工業化の方式（とくに第1次5カ年計画）などについては、同じ類型に属するといつてよい。したがって、中共の基本的な性格の中には、もちろんこ

れらの共産主義体制一般がもっている特徴が含まれている。しかし、両者には、また、約半世紀にわたる異なった歴史的環境、異なった出発点、異なった国民などの要素が存在しており、二つの体制の間にはきわめてユニークな相違点が存在している。たとえば、現代の中国が巨視的にはいわゆる「スターリン段階」にあるということが一般的にはいえるとしても、微視的にみるならば、スターリンと毛沢東の体制には非常な違いがあるというようにである。

では、このように時系列的・同時代的な座標軸でみた場合、異なった地域と体制との間に、同質性と異質性とを並存させながら、当面する複雑な諸問題を処理していく中共のリーダーシップには、その根底にどのような「基本的性格」が潜められているのであろうか。おそらく、それにはまずシュオルツ氏がすでに指摘しているような、中共が革命根拠地を20年にわたって保有していたということ、これとの関連で形成された「中共の特質」ということが考えられなければならないであろう。それはまず「統治」の経験と「ゲリラ戦争」の展開という、いいかえれば、反乱集団であると同時に統治集団でもあったという二重的性格であろう。このような歴史的背景は、今日の毛沢東を中心とする中国共産党指導部の思想と行動を理解するうえで決定的な要因である。中共のリーダーシップを特徴づける主要な側面——大衆路線、批判と自己批判、整風運動、人力の重視、思想工作・観念の重視、永久的連続革命論、政治経済問題についての軍事的行動様式の導入、「鉄砲からすべてのものが生まれる」というような軍事的観念の重視、統一戦線政策への固執、自力更生論等は、すべて農村革命根拠地の発展と深いつながりがある。毛沢東のいわゆる「農村工作重点主義」＝農村革命

根拠地論の成功がコミンテルンの支持を必要としないで1935年1月、かれを党の指導的地位に立たせることに成功したこと自体は、もちろん重要な意味を毛沢東のリーダーシップに付与している。しかしながら、さらに重要なのは、より広い意味におけるソビエト・ Kommunismusとの関連を含めて、このような毛沢東の台頭とかれの革命戦略の特殊性が、大長征以後中国共産党の体質に独自のものを形成させることになったことである。ゲリラ戦争は中国共産党に二重の意味での対ソ独自性を与えた。その性格は確かに「マルクス・レーニン主義」と「中国」との混合物である。イデオロギーが行動基準として有効性をもちうるためには、革命家は、その中から状況との緊張関係において利用可能な要素を主体的に引きださなくてはならない。したがって、そこにはイデオロギー的前提の「変容」もあれば「分解」もあり、「発展」もあれば「民族化」も起こりうるであろう。毛沢東は一貫してその革命運動においては現実対処的であったのである。

だが、これらの特質がゲリラ戦争のどの面から形成されたものであるかを考えてみる必要がある。組織論の側面からこの問題に接近するフランツ・シャーマン (Franz Schurmann) 氏のような方法も存在する。ゲリラ戦争は中共の特殊性を形成する外的機能的条件であるからである。ここから中共の特殊な党の組織論、行動様式が発生する。しかしながら、わたくしはここで、中共の「黨員」つまり最も基本的人間的な側面からこの問題に接近を試みてみたいのである。というのは、中国共産党の人的構成がまずゲリラ戦争によって制約されてくると同時に、そのようにして吸収された黨員のもっている特質が、中国共産党の組織活動にさまざまな影響を与え、これに対する対応として、

中国共産党の党風もまた形成されてくるからである。

そして、この時代に現われた中共の組織的状况の問題は、今日でも依然として基本的には一貫した課題として中共指導部の前に立ちはだかっているようである。中国共産党の党としての特質の形成を考える場合、このゲリラ戦の機能的な側面と、質的な側面の二つの面からの接近が必要であろう。

## II 党の指導的地位

だが、党の人的構成の分析にはいる前に、現在「プロレタリアートの指導」を実行していると主張する全体主義的支配政党としての中国共産党の地位について、その一般理論と機能をここでまず要約しておくことが必要であろう。そこにはあらゆる政治体制にみられるように、「理念」と「現実」とのギャップが存在しているのである。

今日の中国共産党が、中国人の政治生活を中心として生活の全領域において決定的な役割を果たし、政治指導を独占していることを明確に表現するものとしては劉瀾濤のつぎの言葉が最も適当であろう。すなわち、「プロレタリアートの指導するわれわれ社会主義の国では一つの“政治設計院”があるだけであって、二つの“政治設計院”があるわけではない。総路線と基本任務、活動の基本方針と全般的な配置はすべて党が一元的に指導すべきである」(注4)。レーニンは周知のように『何をなすべきか』において、「現実のプロレタリアート」と「前衛党」との区別を行ない、「職業的革命家による前衛党」という概念をつくりだした。中国共産党規約によれば、「中国共産党は中国労働者階級の前衛的組織部隊であり、その階級組織の最高形態である」と規定している。そして、その最

終目標は「中国において社会主義と共産主義を実現することである」としている。この論理に従えば、共産党とは「プロレタリアートの」意識とイデオロギー（その実体は多元的でありうるにもかかわらず権力によって一元化されているが）をもった前衛集団であるということである。したがってマルクス・レーニン主義の論理では社会主義革命においてはプロレタリア独裁が存在しなければならず、プロレタリア独裁はプロレタリアートの前衛政党すなわち共産党の指導によって実現されなければならない。そしてスターリンによれば「プロレタリアートの独裁は本質的にはプロレタリアートの前衛の“独裁”であり、プロレタリアートの基本的な指導力としてのかれらの党の“独裁”である」<sup>(注5)</sup>。毛沢東も中国共産党の指導の独占性を、1939年の論文「中国革命と中国共産党」においてすでに、「革命の徹底的な完成を指導することは、中国共産党を除いては他のどのような政党にも果たせないことである」、そして、「中国共産党の指導を離れてはいかなる革命もすべて成功できないのである」と明確にのべている。このような党の一元的な指導は具体的には、政府、軍隊、人民団体、公安、法院、検察、財政、経済、文化、教育、科学、衛生など社会のすべての「革命組織」に及び、党中央と地方の各級党委員会（基層組織までを含む）のコントロールのもとで党の政策が実行される仕組みになっている。劉瀾濤は「いかなる革命組織も革命事業の中で積極的な役割を果たし、大きな誤りを避けようとすれば、必ず自己を完全に党の指導のもとにおかなければならない」とまでのべる。ここでは、すでに多くの学者によって指摘されているように、党と政治権力が癒着し、党が「国家の中の国家」または「国家の上に立つ国家」となり、国家機構は党の政治目標の実現のた

めの「装置」となる<sup>(注6)</sup>。

そして、このような「指導」を行なう「前衛党」は、組織的側面からみると、党規約で規定されるように、「すべての党员が守らなければならない規律によって結ばれた統一的な戦闘組織である。……党の団結と統一が党の生命であり、党の力の源泉である」という、民主集中制原則を基礎とする巨大な官僚制的集団である。だが、支配政党としての共産党の組織の巨大化と官僚制化過程が進むにつれて、その「指導権」の基盤となっている「プロレタリア独裁」の概念はしだいに「神話化」してくるのである。「民主集中制」機能の変質が不可避的となり、政策決定の権限の上部への集中が現われる。党中央委員会の役割の相対的低下、政治局——政治局常任委員会への権力の集中が現われ、党の全国代表大会も国家的政策の創造的役割を果たすのではなく、党中央の政策の発表の場となる。しかも全国代表大会、中央委員会も党規約どおりに開かれず、言葉の上ではいかに党内の集団指導制と民主主義が強調されても、党内における「寡頭制化」という基本的傾向は除去できない。とくに、1958年以後強化された毛沢東の指導と「思想」に対する個人崇拜はこの傾向に拍車をかけるのである。「党の指導」のカリスマ化は、現在では、「党の指導者に対する熱愛は、党、階級、人民、そしてわれわれの偉大な祖国に対する熱愛と完全に一致するものである」<sup>(注7)</sup>という段階に達し、ここではいわゆる「権力的人格化」(デュベルジェ)<sup>(注8)</sup>をもたらしめている。「毛沢東思想」の学習運動は、「中国人全体の毛沢東化」などといわれるように、「理論」の深化と発展のための学習というよりは、「意識」の変革と思想的教化による権力の意思への同調化を再生産しようとする政治的教育運動である。

L・シャピロ氏は、「ソビエト共産党は、歴史上のいかなる市民的組織にもまして、党をその頂点から支配するひとびとのパーソナリティに依存している」(注9)とのべているが、中国共産党もその規模の巨大さ、新党員の爆発的增加にもかかわらず、毛沢東を中心とした最高指導部を構成するひとびとの思想と行動様式によって、巨視的には、その基本的性格が形成されているとみて間違いはないであろう。その意味で党指導部の性格の分析は特に重要である。

(注4) 劉瀾濤,「中国共産党は中国人民の社会主義建設の最高の統率者である」、『輝かしい十年』,外文出版社,北京,299ページ。

(注5) 『スターリン全集』,第8巻,55ページ。

(注6) H. Arthur Steiner, "The Role of the Chinese Communist Party", *The Annals*, Special Issue on "Report on China", September 1951, p. 59.

(注7) 劉瀾濤,前掲書,304ページ。

(注8) M. Duveager, *Political Parties*, p. 182.

(注9) Leonard Schapiro, *The Communist Party of the Soviet Union*, 1960, p. 590.

### III 党の階級的基盤

前項の要約によっても明らかのように、中国共産党は現代中国において「プロレタリアートの指導」を実行すると称するモスカのいう意味での一つの「支配階級」(注10)である。ではこの党はゲリラ戦争によって権力への道を歩んだことによって、「前衛」としての社会的性格にどのような逸脱を発生させているのであろうか。党の現実的な階級的基盤とは何であらうか。

#### 1. 党の現実の階級からの遊離

前述したレーニンの「職業的革命家による前衛党」という概念は、党は「産業プロレタリアート」との現実的結合関係をつねに保持していなければならないという前提に立ってなりたっていたので

ある。これはレーニンにおいては、党が「プロレタリアートの指導」を実現するための必要条件であったのである。このような前提はおそらくレーニンの意識・政治主義がマルクスの描いた例の歴史的・概念としての「プロレタリアートの客観的役割」という観念とつながるための最後の絆であったろう。中国共産党は「前衛党」というレーニンの概念を「民主集中制」という党組織論の側面で全面的に受け継いでいるが、この「産業プロレタリアート」との結合という側面ではさらに意識偏重の道へと逸脱していくのである。

中国の革命戦略の主流となった毛沢東路線(その原初的形態は1927年の湖南農民運動にみられるが、1935年1月の遵義会議で党の正式の指導権を掌握した)は革命方式と党員の構成の両面で、現実のプロレタリアートからの遊離を特徴としている。おそらく、中共のこのような性格は「産業プロレタリアートの不在」という社会的条件のもとで行なわれる共産主義志向型の革命にとっては不可避的なものであろう。B・シュオルツ氏はこの問題について、「党の階級に対する関係の問題において行動の上で示された毛沢東の異端は、この(マルクス主義の——筆者注)分解過程のよりいっそうの進展を示すものである」(注11)と指摘しているのである。R・レーヴェンタールは、中国共産党を「全体主義的な幹部だけの政党」と規定し、「毛の場合はかれがこのプロレタリアの擬制を意識的に無視して、近代的全体主義政党の厳密な意味での無階級的性格をはっきり認めていなかったならば、かれはその歴史的大事業をとうてい成しとげることではできなかったであろう」(注12)とこの点を徹底的に追求し、「伝統的なマルクス主義的擬制」にしばられない政治的行動の自由こそが、毛沢東の成功の「秘訣」であると断定している。

## 2. 農民を基盤とする党

たしかに、毛沢東は1927年3月の「湖南農民運動考察報告」において、「民主革命完成の功績を10点とすれば、市民および軍隊の功績はただ3点であって、農民の農村革命における功績は7点をしめる」<sup>(注13)</sup>とのべて、農民の革命的潜在能力が重視さるべきであるとのべている。毛沢東においては、農民は革命の「主要勢力」として最も高く評価されており、この「報告」には、「プロレタリアートの指導のもとに」という言葉もなければ、「産業プロレタリアートの基盤に立つことの必要性を固執するレーニン主義的主張の反響はまったく見られない」<sup>(注14)</sup>のであった。周知のように、毛沢東がその後形成した「農村工作重点主義」という革命方式は、農民を指導して土地革命とゲリラ戦争を行ない、革命根拠地と紅軍を建設して、「武装した革命的農村をもって都市を包囲」し、最後に都市を奪い取るというものであった。要するに、中共の革命運動の流れ——第1次国共合作、ソビエト革命、抗日戦争、戦後内戦——の中においては、われわれが、そこにおける現実の党と階級との関係を問うとすれば、党と都市産業労働者との関係の稀薄化傾向を歴史的現実として認めざるをえないのである。R・C・ノース氏は、1926～30年の時期においては、「中共の大衆運動は主としてプロレタリア的組成から、主として農民的組成への鋭い転換を行ないつつあった」<sup>(注15)</sup>とのべている。毛沢東は1926年3月の「中国社会各階級の分析」においては、たしかに、「工業プロレタリアート」は「革命運動の指導力」であるとのべてはいるが、この発言はその当時に発展した都市の労働運動に刺激されたものと思われ、その後のかれの論文や現実の革命方式の中には、この問題をさらに具体化したり、明確化したりはしていないので

ある。結局、毛沢東の革命戦略の根底にある、農村ソビエト革命運動の構造から判断できることは、かれが、「プロレタリアートのヘゲモニーと都市労働運動との結びつきを、コミンテルンのように（あるいは当時の中国共産党主流派のように——筆者注）絶対的關係において考えてはいない」<sup>(注16)</sup>ということである。その後、毛沢東がレーニンから継承して用いた「プロレタリアートの指導」という概念は、「武装した反革命にたいして武装した革命が闘っている」（スターリン）革命戦争を主内容とする中国革命の現実のもとでは、都市のプロレタリアートから遊離し孤立化した中共の、貧農を主体とした赤軍に対する指導に転化していつているのである。江西ソビエト期の中華ソビエト共和国においても、また、新民主主義体制の原型とされた抗日時期の辺区政権においても、近代的産業労働者の存在は乏しく、農民出身の党員の比重のきわめて大きな職業的革命家たちのエリート集団としての中共が指導権を握っているのである。

## 3. 階級性の精神主義

劉少奇はこのような現実に対して、1945年に「それは中国の現在の革命が実質的には農民革命だからである」<sup>(注17)</sup>とのべている。そして、中共は党員の社会的構成が農民的であることを公然と承認せざるをえないのである。劉少奇は、「わが党の組織の大部分はまだ農村におかれており、わが党員の圧倒的多数は農民および小ブルジョア出身である」とのべる<sup>(注18)</sup>。では、そのような党がなぜ「プロレタリアートの前衛党」でありうるのか。かれの論理はつぎのようである。劉は続けてのべる。「党員の社会的出身だけによってすべてが決定されるものではない。決定的なものはわが党の政治闘争と政治生活であり、わが党の思想教育、思想指導および政治指導であり、わが党の一般綱領お

よび党の組織原則が党内におけるプロレタリア的思想とプロレタリア的方針の支配的地位を保障していることである。」そして、「わが党は毛沢東同志の党建設方針を採用してきたので、たとえ、労働者的要素はまだ大多数を占めてはいないにしても、やはり労働者階級のマルクス主義政党を建設することができるし、また、すでにできたのである」(注19)とのべる。このような構想は中共特有の党員に対する「修養」「整風」「改造」という建党方式と軌を一にすることは明らかであろう。この言葉の中に階級性についての中国共産党の主観主義的・精神主義的傾向が典型的に示されている。そして、現在においても、このような傾向は思想・政治戦線での永久革命という形で再生産されているのである。

しかしながら、このような中共の建党方針は、反面では実際の労働者階級を入党させようとする努力を軽視したり、農民的な階級的構成に満足していることを示すものではない。劉少奇も同時に「わが党は労働者のあいだの先進分子を吸収するよう最大の注意をはらうべきである」(注20)とのべている。1939年に書かれた陳雲の論文「いかにして共産党員となるか」(注21)は、この問題について中共の立場を体系的にのべている。すなわち、「共産党がプロレタリアートの前衛隊であるということは、プロレタリアートの中の自覚的先進分子によって組織されているということである。しかし、党がプロレタリアートの前衛隊になるためには、党員の成分についてつねに系統的な注意を払い調整しなければならない」。そのための第1の任務は優秀な労働者成分を増加し、計画的に党内のプロレタリア的骨幹を強化することである。そして、「これはわが党の組織上の一つの重要問題である」(注22)とのべている。陳雲は党の労働者的基盤の

脆弱化の原因として、素直に、「わが党の過去における都市労働運動の中での活動が比較的弱く」、また労働者階級への激しい弾圧、日本軍の都市への侵入などがその原因であるとのべる。中共政権成立の前後の時期、1949年3月の7期2中全会では労働者階級の入党を推進するよう指示し、翌50年6月の3中全会でも党の組織状況の改善が要求されているのである(注22)。

#### 4. 階級構成

中共党員の社会階級別構成に関する統計はきわめて乏しい。しかしながら、断片的な資料からでも、その一般的な傾向は知ることができる。まず年代順にこれを見ることにしよう。

初期の段階については、R・C・ノース氏は、「共産党の計算に従えば、1926年末ごろには、中共党員の少なくとも66%はプロレタリアートとして階級区分しうるものであった。その他の22%は知識分子であると考えられた。そして、ただの5%が農民であり、2%が兵士であった。しかし、1930年の初期においては、労働者階級とレッテルをはれると思われる要素は中共党員の中で全部でわずか8%であった。しかも産業労働者の数はいぜんとして少なく、党員のわずか2%を数えるのみであった」(注23)とのべている。1931年3月5日の中共中央の「党組織発展に関する決議案」によると、「真の意味の産業労働者は全国ではやはり2000人にすぎず、ソビエト区内においては農民が絶対多数を占めている」。陳紹禹は、第1表に従って、「いわゆる今日の中国のソビエト運動が純粋な農民運動であるという言い方は根拠がない」とのべたうえで、「1932年2月鄂豫院蘇区省委の報告によれば党の省代表大会に出席した326人の中には25人の労働者と75人の雇農がいる。いいかえれば、プロレタリアートの成分は約30%を占めている」と指

第1表-A 1929年9月～10月、贛南各県党員人数  
および社会成分統計表

県 名	人 数	成 分 (%)		
		工 人	農 民	富 農・ 知識分子
興 国	350	10	50	40
雲 都	270	10	60	30
安 遠	70	40	50	10
尋 鄔	300	15	60	25
信 豐	120	20	60	20
南 康	80	10	60	30
上 猶	60	5	50	45
贛 州	60	50	40	10
大 庾	60	80	10	10
寧 都	200	10	70	20
合 計	1,570	25	51	24

(出所) 陳紹禹、『為中共更加布爾塞維克化而闘争』、解放社、1940年、112ページ。

第1表-B 1929年9月～10月、贛南赤色武装組織  
社会成分統計表

県 名		成 分 (%)		
		工 人	農 民	そ の 他
興 国		5	70	25
雲 都		5	55	40
安 遠		20	70	10
萬 秦		10	60	30
南 康		10	70	20
尋 鄔		5	70	25
寧 都		5	70	25
崇 義		10	70	20
		9	67	24

摘している。だが、この場合でも、25人の「労働者」は326人の中で7.8%を占めるにすぎない。1932年中期の赤軍の社会構成をみても、その第1軍から第14軍までの兵士の中には貧農は57.7%、労働者は3.63%を占めているのである(注24)。いずれにしても、労働者階級の構成的比重の相対的低下は、否定することはできないのである。また、中国共産青年団の組織状況について論じた凱豐の報告(注25)によれば、1933年5月の江西省の興国県等12県の団員総数の中で青年の労働者(労働者・雇農)成分は12%弱であり、信豊等6県の団員総数の中

では貧農は74.7%を占めている。福建省では、同時期の青年労働者成分は12%弱であり、貧農は70.5%、中農は16%を占めているとのべられている。そして、このような「プロレタリアートの基礎の薄弱さはわれわれが特別に注意するに値することである」としている。

延安時期にはいと、1939年11月の楊尚昆の報告では、「現在華北の党の組織成分は農民が最大多数を占めている(60～83%)が、労働者成分は最も多いところでも10%にすぎず、最も少ないところでは5%にも達していない。知識分子はあるところでは25%を占めているが、幹部の中では70%を占めている(山西省某地区委のごとく)」(注26)としている。

1949年末の党員構成については、『人民日報』は「もし労働者、雇農、貧農、都市貧民の4種のプロレタリアート・半プロレタリアート成分を合計すれば、昨年末の統計に従えば、わが党の326万余の地方党員の中で、これらの成分は合計62%に達する」(注27)としている。しかし、この数字には貧農の占める比重は示されていない。1951年7月1日の『南方日報』(中共広東省党委機関紙)では、薄一波が「華北には180万の党員がおり、その中で農民出身の党員は150万人ほどいる」(すなわち全体の83%)とのべている。現在の中共の党員構成を示す最も包括的な統計は、中共中央組織部発表の統計で、これによると1956年6月末現在で、党員総数のうち労働者出身党員は14%、農民出身党員は69.1%(うち中農19.1%、貧農50%)、知識分子出身党員は11.7%、その他5.2%である。この比率は1957年9月の8期3中全会の発表においても大きな変化はない(注28)。このような中共党員における農民出身者の比重の高さは、ソ連共産党等の例と比較するとより顕著である。たとえば、ソ



連共産党では1918年から29年までの間に農民党員の比重が最高となったのは24年の28.8%であるが、1926年12月17日のソ連総人口に対する農村人口の比率が82.1%であり、そのときの農民出身党員は25.9%を占めている<sup>(注29)</sup>。また、1954年におけるユーゴスラビア共産党においても、農民出身者層は27%を占めるにすぎないのである<sup>(注30)</sup>。

では、中共の1956年6月現在の69.1%の農民出身党員をつぎのように分析してみよう。8全大会の報告では総党員1073万4384人の中で1949年以前の入党者は40%であるとされた。すなわち、この段階では約429万人である。1951年の華北党員の83%が農民出身であるという薄一波の報告があるので、1949年以前入党者をこの数字で分類してみると、356万人が農民出身であることになる。1956年6月現在の農民出身党員は741万人であるから、これから356万人を差し引いてみると385万人が残る。したがって、この385万人の新しい農民出身党員は総党員数の60%を占める新党員644万人の中で約60%を占めることになるのである。要するに、1950年1月から1956年6月までに入党し、1956年6月現在党籍を保持しているもの（後述するようにこの段階では除籍者があるが）<sup>(注31)</sup>の中で約60%がやはり農民出身者であるということになるのである。

農村における中共の党組織の建設が積極的に行なわれるのは1955年にはいつてからである。1954年代までは中共の建党対象は都市にあり、むしろ基層レベルよりも上層レベルを強化しようとしていたのである<sup>(注32)</sup>。1955年2月、中共中央委員会は、第1次全国農村基層組織工作會議を開いて、農業の社会主義改造に関連して農村党組織の整頓と積極的建設の任務を提起している。この段階で明らかにされたところによると、「当面全国22万余

の郷ではすでに17万余の郷が党の基層組織を建立した。農村にいる党員は400万人近くに達し」<sup>(注33)</sup>ている。そして、1955年11月現在では、「1954年6月末の時期には全国でまだ70%の郷が党の支部を建てたにすぎなかったが、現在では、全国の90%以上の郷がすべて党支部をもうけている」<sup>(注34)</sup>。また1954年7月2日の『南方日報』によると、「中南区各地の農村では現在4万9000余の中国共産党支部がすでに建てられている。すなわち65%前後の郷の中で共産党の組織を有するようになった。……ここ1年のあいだ広東省全省では70%以上の郷が党の組織をきずいた」とのべている。

このように、1954年中期から1955年末にかけて、中共の農村党組織は発展し、全郷の90%をその網の目の中に組み込んだのである。この時期に農民党員も急速に増えているものとみられる。すなわち、「1955年前半、全国農村での農業合作化運動中の積極分子48万5000人が中国共産党に参加した」<sup>(注35)</sup>といわれ、鎮海県では「1954年冬までに党員の数量は1953年春に比べて7倍に増加した。94%以上の郷が党の支部をきずいた」<sup>(注36)</sup>。広東省では1949年現在の党員総数は4万人であったが<sup>(注37)</sup>1954年7月には「農村党員はすでに8万3000余人

第2表 中ソ共産党員の職業的分布（%）

	ソ連 1961	中共 1950. 6	中共 1951. 7	中共 1955. 2	中共 1956. 6
農・林・業	23.3		52.6	47	57.8
調達、販売、交易	5.4	73			4.9
教育、科学、衛生、文化	15.6				3.8
工業、建設	33.5		47.4	53	10.4
軍隊		24			20.7
国家机关、党	10.8	3			
運輸、通信	9.2				2.4
自治経済とその他の支局	2.2				

（出所）Merle Fainsod, *How Russia is Ruled*, 1965, p. 277. 『人民日報』, 1950年7月1日社論, 『理論学習半月刊』, 1956年10月, 『光明日報』, 1955年3月9日資料より作成。ソ連については Territorial の党組織の場合である。

に増加した」(注38)のである。党員の職業別分布状況は第2表のごとくであるが、1955年から1956年にかけての党員の農林業地域での分布の増大がこれらの事実を裏書きしていよう。

## 5. 党指導部の階級的基盤

フランクリン・ホウン氏は「現在の中国共産党指導部は、強力なプロレタリアもしくは貧農的背景をもっているのではなく、主として中国社会の中流および中流の上層からひきだされてきたものである」(注39)と指摘しているが、あらゆる革命集団の発生の社会的基盤と比較して中共もその例外ではない。指導部の社会階級的背景を調査した研究はR・ノース氏によるものと、F・ホウンおよびロナルド・クライン氏(注40)によるものがある。第3表はR・ノース氏によるものである。ノース氏はここで、「とくに、起こりつつあったことは農民の指導権の台頭であった。毛の権力への台頭、および奥地でのソビエト地区の出現は、中産階級と上流階級的背景をもったインテリが農民の子弟によってとって代わられるという現象を伴った」(注41)と指摘し、毛沢東の農民暴動とゲリラ基地の政策が、党指導部において軍人の台頭を促進しているとのべている。

第3表 中共政治局員の父親の職業

父 親 の 職 業	最初に政治局員となった時期	
	1921~28	1931~45
農 民	3	7
プロレタリアート	1	1
学者、学者官僚	4	1
地主	3	2
商人	1	1
(小 計)	12	12
不 明	15	3
計	27	15

(出所) Robert C. North, *Kuomintang and Chinese Communist Elites*, 1952, p. 58.

第8期中央委員会委員(1956年7月現在97人)について分析したF・ホウン氏は、その社会的出身について明らかになっている81人のうちで、地主出身が28人、富農23人、富裕商人10人、労働者7人、官僚5人、教師4人、貧農4人という割合であるとのべている(注42)。そして、入党時期の職業の判明している中央委員80名のうち、学生が50人、軍人11人、官僚5人、教師4人、労働者4人、作家3人、新聞記者1人、大学教授1人、船員1人であり、学生が圧倒的に多数を占めている点について着目している(注43)。さらに97人の中央委員の軍事的経験については、82人が1927~35年の間各地のソビエト地区で全期間または一時期ゲリラ戦争に参加し、73人が大長征に参加している(注44)と指摘している。そして、「軍隊と党組織に対して統制力をもつひとびとが党の最高指導部へ最も容易に接近できたことは明らかであり、それは党が過去において行なった革命闘争の形態の当然の結果である。軍事的反乱と大衆の操作が闘争の主要形態であった以上は、これらの技術の専門家が有利な地位を占めてきたのである」(注45)とのべている。劉少奇のように大長征に加わらなかった人物もいる(注46)けれども、中共指導部の組織的能力とゲリラ戦的思考様式の歴史的背景がここによく示されているであろう。

## 6. 入党条件の現実主義

以上の状況は、農村人口が中国の総人口の80%以上を占める(1949年には農村人口は89.4%, 1957年には86%, 1962年には農業人口は80%)という中国社会の特殊性と、中国革命の過程で示された農民の「偉大な革命的作用」をもとにして、「かれらの中の積極分子を党の中に数多く吸収し、党の農村における社会的基礎を農村プロレタリアと貧困な農民分子に置くことが絶対に必要である」(注47)とさ

れたこと、および政権獲得後7年で早くも農業の社会主義化に着手したことなどがその原因としてあげられるであろう。

だが、中国共産党がレーニンよりさらに主観主義的な前衛理論を前提としている以上は、前述のような建党政策が革命運動の現実的必要性に優先権を与えているとしても、それは矛盾ではないのである。党は革命の組織としてたえず強化されなければならないのである。ゲリラ戦争期には農民を主要な基盤とし、「農村から都市へ」移行した場合には、都市の党組織の建設と産業労働者の吸収が奨励され、農業集団化ではふたたび農民へと目が移される。革命段階では現状不満の、建設段階では体制同調的な知識分子が入党の対象とされる。要するに、毛沢東も党の大衆化を強調し<sup>(注48)</sup>、劉少奇が「広範な大衆性をもった強力な党」の形成を説いているように、「組織」の拡大が基本的目標とされ、その過程で発生する「不純な思想と行動」の除去に関連して「階級的基盤」が問題にされるという一般的傾向がある。中国共産党の入党規定がソ連共産党に比べてより「開放的」であるという理由は、農民大衆と密着したゲリラ戦的伝統と、社会の全体主義的官僚制化がまだ形成期にあり流動的であることなどに求められるであろう。中国共産党にとっては、党の「純粋性」を守ることはもちろん重要ではあるが、過去の革命運動と現代の急テンポの社会主義建設にとっては、党組織の拡大がまず必要であったのである。

(注10) Gaetano Mosca, *The Ruling Class*, Edited and revised by Arthur Livingston, p. 50 & p. 329.

(注11) Benjamin I. Schwartz, *Chinese Communism and the Rise of Mao*, 1952, p. 202.

(注12) リーヒャルト・レーヴェンタール、高橋直訳、『国際共産主義』、117ページ。

(注13) 毛沢東、「湖南農民運動考察報告」、『嚮導週報』、191号(1927年3月20日)、22ページ。

(注14) B. I. Schwartz, *op. cit.*, p. 76.

(注15) Robert C. North, *Kuomintang and Chinese Communist Elites*, 1952, p. 32.

(注16) 石川忠雄、『中国共産党史研究』、311ページ。

(注17) 劉少奇、前掲書、37ページ。

(注18) 同上書、24ページ。

(注19) 同上書、27～36ページ。

(注20) 同上書、28ページ。

(注21) 陳雲、「怎樣做一個共產黨員」、1939年5月30日、『整風文獻』、解放社、1950年3月、75ページ。

(注22) 『人民日報』、1950年7月1日社説は、「しかしこのことは、わが党が当面のこのような過去の歴史的條件の制限の下で発展してきた党の組織状況に満足してよいということではない。昨年3月の党の7期2中全会いらい党はすでに労働者の入党について重点をおいてきた。たとえば北京で昨年増加した3350人の新黨員の中では労働者成分は50%強であった。天津では昨年末の4カ月で増加した6648人の新黨員中、労働者成分は73%を占めた。党中央は3年から5年のうちに段階的に3分の1の産業労働者を十分な革命的自覚の條件のもとで入党させることを希望している」とのべている。

(注23) R. C. North, *op. cit.*, pp. 32～33.

(注24) 東亜経済調査局、『支那ソヴェート運動の研究』、189ページ。

(注25) 凱豊、「蘇区団の組織状況與我們的任務」、『赤匪反動文件彙編』、第1冊、289ページ。

(注26) 楊尚昆、「華北党建設中の幾個問題」、1939年11月24日。

(注27) 『人民日報』、1950年7月1日社論。

(注28) 鄧小平は「整風運動報告」で、労働者13.7%、農民66.8%、知識分子14.8%、その他4.7%と報告している。

(注29) Merle Fainsod, *How Russia is Ruled*, 1965, p. 250. およびソ連閣僚会議付中央統計局、産業経済研究所訳、『ソ連国民経済統計集』、17ページ。

(注30) Fred Warner Neal, "The Communist Party of Yugoslavia", *The American Political Science Review*, March 1957, p. 99.

(注31) 後述するように、20万人の除籍者のうちで、

農民党員の比重が高ければ、60%以上という数字になるであろう。

(注32) Franz Schurmann, "Economic Policy and Political Power in Communist China", *The Annals*, September 1963.

(注33) 『光明日報』, 1955年3月9日。

(注34) 天津, 『大公報』, 1955年11月25日。

(注35) 前掲紙。

(注36) 『人民日報』, 1955年3月11日, 社論。

(注37) John Wilson Lewis, *Leadership in Communist China*, p. 114.

(注38) 『南方日報』, 1954年7月2日。

(注39) Franklin W. Houn, "The Eighth Central Committee of the Chinese Communist Party: A Study of Elite", *The American Political Science Review*, June 1957, p. 397.

(注40) Donald W. Klein, "The Next Generation of Chinese Communist Leaders", *The China Quarterly*, No. 12, Oct.~Dec. 1962.

(注41) R. C. North, *op. cit.*, p. 58.

(注42) F. W. Houn, *op. cit.*, p. 397.

(注43) *Ibid.*, p. 398.

(注44) *Ibid.*, p. 400.

(注45) *Ibid.*, p. 400.

(注46) 石川忠雄, 「劉少奇をめぐる若干の問題」, 『中華人民共和国——その実態と分析』, 53ページ。

(注47) 陳雲, 前掲論文, 76ページ。

(注48) 毛沢東, 「中国革命戦争の戦略問題」(1936年12月), 「中国共産党の民族戦争における地位」(1938年10月)を参照せよ。

#### IV 党員数の増加

中国共産党は1921年7月に上海のフランス租界の一隅でひそかに誕生した。この1全大会に報告された党員数は57人であった。1924年1月に始まる第1次国共合作＝統一戦線政策の成功は中共に広大な活動の分野を提供し、当時の労働運動の急速な発展を背景として、1927年4月の5全大会が開かれたときには党員数は5万7967人を数えた。しかるに、同月12日に起こった蒋介石の「上海ク

ーデター」とその後の武漢政府の崩壊は、党に重大な打撃を与え、1927年末には党員数は1万人を数えるのみとなった。党員数の推移は、第4表に示されているように、その後、江西ソビエト政権(1928~34年)の発展と崩壊、大長征(1934年11月~35年10月)、抗日戦争の開始(1937年7月)、中共辺区

第4表 中共党員数と対人口比率

年 代	党 員 数	総人口(年末)	総人口との比率(%)
1921(7月1全大会)	57		
1922(7月2全大会)	123		
1923(6月3全大会)	423		
1925(1月4全大会)	950		
1927(4月5全大会)	57,967		
1927(年末)	10,000		
1928(7月6全大会)	40,000		
1930	122,318		
1933	300,000		
1934	300,000		
1937	40,000		
1940	800,000		
1941	763,447		
1942	736,151		
1943	900,000		
1944	853,420		
1945(4月7全大会)	1,211,128	(解放区)	
	1,348,320	95,000,000	1.27
1946	2,200,000		
1947(1月)			
1947(秋)	2,759,456		
1948(7月)	3,065,533		
1949(12月)	4,488,080	541,670,000	0.83
1950(6月)	5,000,000		
1950	5,821,604	551,960,000	1.05
1951(6月)	5,762,293	563,000,000	1.02
1952	6,001,698		
1952(12月)	6,080,000	574,820,000	1.04
1953(7月)	6,000,000		
1953	6,612,254	587,960,000	1.12
1954(2月)	6,500,000		
1954	7,859,473	601,720,000	1.30
1955(6月)	8,545,916		
1955	9,393,394	614,650,000	1.53
1956(2月)	9,000,000		
1956(9月8全大会)	10,734,384	627,800,000	1.74
1957(9月)	12,720,000	649,500,000	1.96
1959(9月)	13,960,000	672,500,000	2.07
1961(10月)	17,000,000		(推定) 2.5
1963(5月)	18,000,000		(推定) 2.5

(出所) 党員数については、主として John W. Lewis, *Leadership in Communist China*, pp. 110~111に基づき、それを秦逖, 「剖視中共的《建党》工作」, 『祖国』, No. 204, 1956年11月26日号およびその他の資料で補ってある。人口については、『統計工作』, 1957年第11期24ページ、その他によった。

政権の発展 および戦後の国共内戦とうち続く革命運動の起伏を経ながら、しだいに増加していった。そして、1949年12月、中共政権成立の直後、すなわち、中共党成立の約28年後には、ついに最初の57人の党員から 448 万 8080人の党員を擁する大政党に成長したのである。その後さらに 14年を経た 1963年 5月、中共党員は 1800万人を数え、新政権発足時の 3 倍以上に増加し、世界最大の共産党となっている。

しかしながら、その増加率と規模の大きさにもかかわらず、党員の総人口に占める比重は、第 1 次 5 カ年計画の始まる前年 1952年で 1.04%であり、1954年に至って 7 全大会期の対人口比率に回復し、1963 年においてもまだ 2.5% 前後を占めているにすぎない。1938年のナチ党員はドイツ人口の 6.6%を占めていた<sup>(注49)</sup>し、ソ連共産党についてみても、1926~27 年に 0.78%，1952年に 3.5%，1961年に 4.5%，1964 年に 5 % であるという<sup>(注50)</sup> 数字と比べてみると、中共党員数はまだけっして十分であるとはいえないであろう。劉少奇は、「共産党員はいかなる場合にも 人民の間では少数である」<sup>(注51)</sup>とのべているが、中共中央はこの全人口の 2.5%を占める党員に対して、中国共産主義青年団等の系列的組織の助けを基礎としながら、6 億 5000万人の人民を党の政策の要求する方向に操作することを求めているのである。この場合、この急速に膨張した膨大な組織は、民主集中制という原則に貫かれた一枚岩的な団結を保持して、党中央の意思に従って統一的に行動する「統制されたファランクス」<sup>(注52)</sup>として機能しなければならないのである。中共にとっては、その政策の執行を現実を担当するこのような党員幹部政策こそは、その革命と社会主義建設の戦略体系の中でも核心的な鍵である。では、そのような党員はどのようにして

「補充」されるのであろうか。

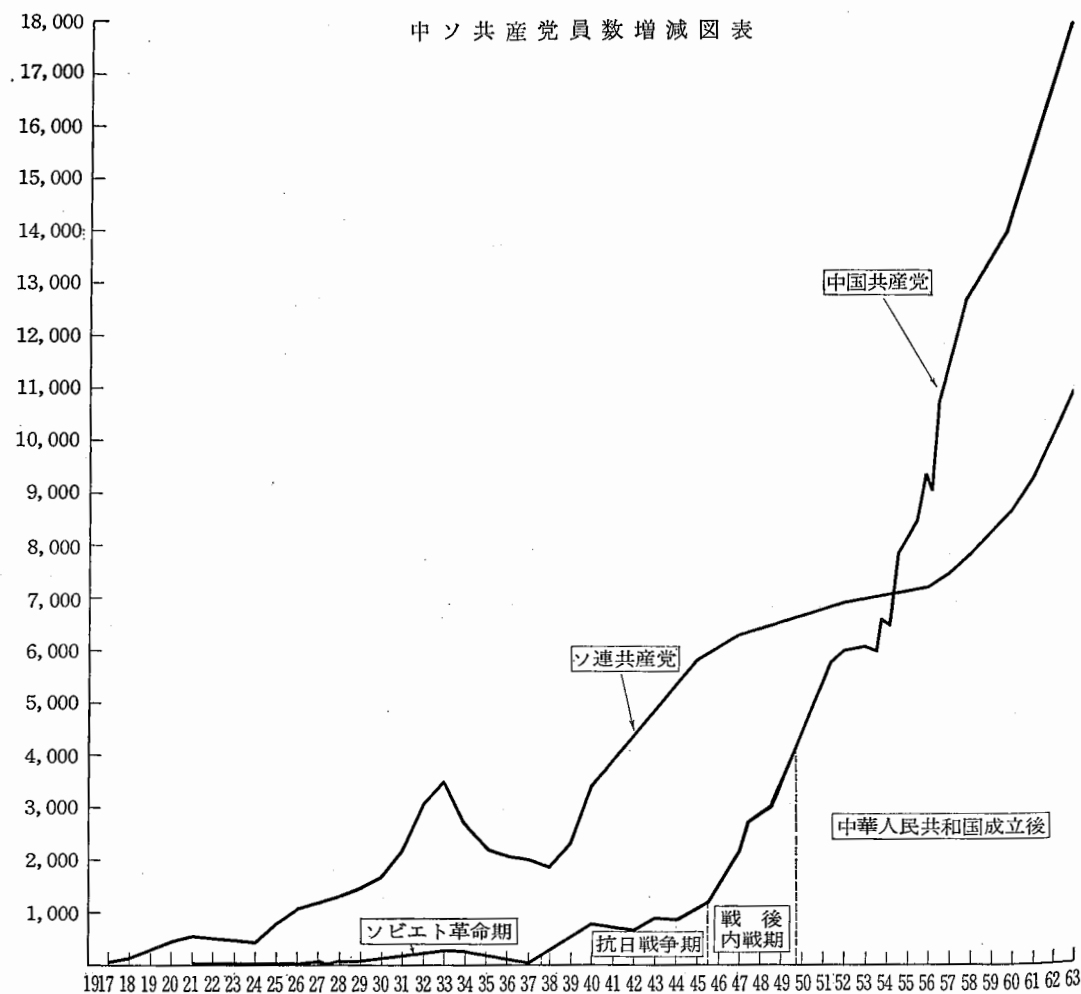
## 1. 入 党 の 規 定

入党に関する規定は 1956年の「党規約」によれば以下のとおりである。すなわち、労働に従事し他人の労働を搾取しない中国の 18歳以上 (1939年~1956年 9月の時期には 16歳以上のものは候補党員となることができた<sup>(注53)</sup>)の公民で、党の綱領と党の規約を認め、党の組織に参加してそのなかで活動し、党の決議を遂行するとともに、規定に基づき党費を収めるものはすべて入党することができる。入党の申請は正式党員 2 名の紹介をもって党細胞に対して行ない、細胞党員会議の決定と一級上の委員会の承認をえ、さらに 1 年間の予備期間を経て、初めて正式党員となることができる。また、特殊な事情のもとでは県・市級およびそれ以上の党の委員会が直接に党員を採用することができることになっている (第 1 条、第 4 条)。1945年の規約では入党希望者に対して出身階級別によって入党手続きに差別が設けられていた。これらの階級別は、(1) 労働者、苦力、傭農、貧農、都市貧民、革命兵士、(2) 中農、職員、知識分子、自由職業者、(3) 前 2 項以外の社会層、(4) 他の政党の普通党員および責任者、の 4 種のカテゴリーであった。ソ連共産党規約では出身階級別の入党手続きの差別は、1939 年規約以後廃止されているが<sup>(注54)</sup>、中国共産党は政権獲得後 7 年を経た 1956年 9月の 8 全大会から早くもこの差別を廃止したのである。このことは、社会主義改造の完成を背景として当時党指導部によって抱かれた 国民的等質性に対する楽観主義を反映したものであった。鄧小平はこのとき、「最近 は情勢がすでに根本的な変化をきたした。……このような社会階層を二つに分けたからとてなんの意味があろうか」<sup>(注55)</sup>とのべている。『人民日報』の 1957年 5月 2日の社説も、「敵対階級間の矛盾は

ふたたび国内の主要な矛盾になることはない。国内問題における党の主要な任務は全人民を結集して生産を発展させること、つまり自然界と闘争することである」とのべた。

1956年から1957年にかけて語られたこの「社会主義への一致した意思の拡大と強化」(註56)という観念は、しかしながら、1957年後半の反右派闘争以後急速にかけをひそめる。1958年4月の8全大会2回会議における報告で劉少奇は、思想戦線と政治戦線の上での「社会主義の道と資本主義の道」の「二つの道の決定的闘争」という社会主義社会

における階級闘争の道を提起したのである。かれは、物質的な基礎はなくても意識と行動の上ではブルジョア的な「毒草は客観的に存在するものであり、1万年後といえどもやはり存在するであろう」とのべる。このような傾向は人民公社化段階以後さらに強化され、1964年には中共中央組織部長安子文は「国内の階級の敵はたえず社会主義制度を転覆し、資本主義を復活させようと陰謀をめぐらしている」(註57)とのべ、「階級的矛盾」の永久的存在を強調している。1964年12月の第3期全国人民代表大会第1回会議における周恩来の「政治活



動報告」公報はさらにこの点を最も明確に示している。1961年1月の9中全会以後行なわれている整風運動の諸徴候からみると、ふたたび「新しい」階級区分の定義が現われたり、党員の政治意識、行動様式等についてふたたび過去の階級的基盤が問われているようである。したがって、現段階における中共指導部の「理論」と8全大会の党規約の諸前提とは必ずしも一致するものではない。これらが入党問題にどのような実際の影響をあたえているかは検討の必要があろう。

## 2. 建党運動と党員の質

一般に、党員補充ということに関しては、共産党は「基準」となるような政策を現実には具体的に持っておらず、あるときには入党資格はきわめて低く、あるときには高められるという傾向があるようである<sup>(注58)</sup>。別掲図は中共党員数の増減を示しているが、その急激な増加率と振幅の少ないことは、ソ連共産党と比較して、中国共産党の特徴であるというのであろう。だが中共の増加率を建党の方式と党員の質という観点からみるとかなり深刻な問題が存在しているようである。概していえることは、党員の吸収が日常的継続的に行なわれると同時に、政策的必要性から意識的に上からの「運動」として行なわれている場合が多いということである。したがって、中共の場合でも、党員の量的拡大と質の不純化という矛盾した問題が絶えず発生している。鄧小平の言葉を借りれば、「少なからぬ党員が、組織の上では入党していても思想の上ではまだ入党していないか、あるいは完全には入党していない」という問題である。

建党の歴史をみてみよう。中共中央組織局は1932年9月24日「徴収党員運動提綱」を出して、「九・一八事件」（満洲事変）を記念して労働者階級を中心とした新党員の大量吸収を指令している。

長征を経て1937年党員数が4万人に減少していた中共は、1938年3月15日、「中央の党を大量に発展させることに関する正確な決定」<sup>(注59)</sup>を発表して、党勢の拡張を積極的に推進しているのである。しかし、それから一年半後の党内状況について、1939年8月25日の「中央政治局の党を鞏固にすることに関する決定」<sup>(注60)</sup>は、「短期のうちに党が猛烈に発展したというまさにそのことのために、党の組織は鞏固であるとはとてもいえないのである。新党員を吸収する工作の中には重大な誤りと欠点が存在している。ある地方の党部は新党員の数量だけを追い求めているために、いわゆる党発展の突撃運動、集団加入、および個別的に詳細に審査しないで党員を吸収するようなことを行なっている。そのために、多くの普通の抗日分子や暫時党と同じ路を歩もうとしている人までも入党してしまっている。異質分子、投機分子、スパイすらも、この機に乗じて入党している。党組織がプロレタリアートの前衛隊として有する作用と、党の組織と群衆抗日団体の区別とが、ある地方では不明確になってきている」と指摘している。楊尚昆も建党についてこのような「競争運動」、「集団紹介」、「鳴鑼徴収」、の方法を批判し、「個別的で、慎重な審査を経て新党員を吸収する」という党中央の指示を守れとのべる。1940年には中共党員は80万人に飛躍的に増大しているが、それらの新党員の文化的水準がまた問題となるのである。楊尚昆はつぎのように指摘する。「党員の大多数は農民であり（80%）、しかも農民中でも貧農、雇農は最も多数を占めている（農民党員の70~80%を占める）ので、一般的に言って、文化水準はすべて非常に劣っている。……したがって、党員の文化水準を高めることは、党建設の中での一つのきわめて基本的な工作であり、華北の党の政治理論水準を高

めるための先決条件である。……いま一般の党員に対して、『なぜ入党したのですか?』と問うてみるとしよう。かれはこう答えるであろう。『抗日救国!』。そう、『抗日救国』は党の今日の基本任務である。しかし、一個の党員となるためにはこのような理解だけに限定することはできない。なお一步進んで党の最終目的、すなわち共産主義を理解しなくてはならないのである。……山西省のある県で、われわれの巡視員が6中全会の伝達の状況を調査しに行ったときのことである。1人の党員に質問してみると、この党員はつぎのように答えた。『はい、6中全会をわたくしは知っています。それはマルクス、レーニン、スターリン、毛沢東などが開いたものであります!』。これはわれわれの下級同志に対する教育がこんなにも適切さを欠いていることを証明している。……党内の新党員、新幹部の中には農民・小資産階級の出身者が多く、組織性、紀律性などすべて不十分で自由主義的傾向が存在している」(注61)と。急激な建党運動のもたらしした実質的内容と課題がここに示されている。

1945年以後の建党運動についても、鄧小平はつぎのようにのべている。「やはり何回となく誤りがくりかえされた。解放戦争当時、一部の解放区の農村ではいわゆる“入党運動”が組織されたり、あるいはいわゆる“自分で申し込み、大衆討議にかけ、党が承認する”というやり方によって、党員がうけいれられた。全国解放前後の2年間は、党組織の発展があまりにも早く、しかも一部の地区ではこうした発展がなんらの指導性も計画性もなくすすめられ、一部の地区に至っては、大衆がまだ動員されていないのに、あわただしく大量の党員がかきあつめられ、支部がつくられたため、党組織にひところはなほだしい不純な現象が生まれた」(注62)と。

革命運動の拡大と発展は入党者を急増させてゆくが、このような党内状況は中共政権成立後においても一貫して継続的な課題として残っている。まず、1950年5月1日の中共中央の「整党に関する指示」(注63)は、「ここ2年間の党の発展によって、約200万人の党員が増加している。だが、その中の非常に多くのひとびとの思想作用はきわめて不純である。……旧党員、旧幹部の中にもまた非常に多くのひとびとがごう慢な自己満足の気持をもっており、嚴重な命令主義作風を發展させている」と指摘している。そこで中共は1950年7月から整風整党運動を開始するのであるが、そのときの『人民日報』は、「昨年1年間の入党者は全国で140万の多きに及んでいる。……党員の政治的質量を高めるためには、今後党員の入党条件を適当に高めなければならない」としている(注64)。毛沢東も、1950年6月6日の報告で、「今からのちは党の組織を慎重に發展させる方針をとり、投機分子が党にもぐりこむのを断乎として防ぎ、投機分子を党からきれいに掃しなければならない。目覚めた労働者をしだいに党に吸収し、党の組織における労働者的な要素を拡大するように注意しなければならない。古くからの解放区では、一般には、農村で党員を吸収することを停止しなければならない。新しい解放区では土地改革が完了するまでは、一般に投機分子が党内にもぐりこむのをふせぐために、農村での党の組織を發展させてはならない」(注65)と述べている。

1951年4月、中共は第1次全国組織工作會議を召集し、「新党員の發展に関する決議」を行ない、党員教育と入党時における社会主義的自覚の有無の判定基準として用いる「共產党員標準の八項条件」を決定している。そして、この「八項条件」は、8全大会党規約の第2条(党員の義務)におい



て「10項目」に拡大されている。「解放」後、中共は各種の革新運動や社会主義的改造運動の過程で、「建党」対象を「発掘」し、積極分子を培養して入党させるという方式を採用しているが、上記の不正常な現象はつねに後を断っていないようである。広東省党委の區夢覺はこの状況を詳細に論じている<sup>(注66)</sup>が、その一部にはつぎのような状況がある。「新党員を發展させる工作の中で、各地には異なった程度において、ひとしく数量を重視し、党員の質を低下させる現象が存在している。主要な傾向としては、大量發展を強調するのみで、必要性に基づいて計画を立てるだけであること、まじめな準備工作を重視せず、対象に対する選定と審査が厳格でなく、家庭的出身だけをみて本人の成分をみない（貧乏であればよい人間だと判断し、本人が長年にわたる労働の農民であるかどうかをみない）こと、一時的な現象だけをみて政治歴史的状況を明確にするように注意しないこと、があげられる。こうしていくらかの反革命分子と悪質分子を党に混入させ、いくらかのまったく党員たるの条件に達しない人を入党させていることになっている。それぞれの県の建党対象の中で20%前後は政治歴史状況がまだ不明確である。さらに、天主教徒、「嘔嚙人」と間違いを建党対象としている。積極分子に対する教育と試験が欠けており、ある場合は建党対象に対する話し合いが非常に簡単でいいかげんである。はなはだしい場合にはつぎのような笑話が生まれてくる。たとえば雲浮県の一党員と一建党対象との対話である。問：『あなたは人民に服務することを希望しますか』、答：『希望します』。問：『あなたは役人になろうと思いませんか』、答：『なりたくはありません』。そこでこの党員はこの対象は役人になって金儲けをしようという思想をもっておらず、社会主義的自覚が非常に高い

と見なしてその人物を入党させようとするしだいである。このほか、入党手続き上、非常に多くの地方では混乱現象が存在している。党章と中央の規定する手続きに従わないで処理している。いろいろなきわめて厳格でない工作方法が存在している」というものである。このように建党に際して「八項条件」をまじめに実行しないとか、入党の動機が単なる「生活問題」の解決のためであるとか、数量主義の突撃的運動とかの現象は、現代の中共の地方新聞のいたるところでみられるのである。1957年後半からの反右派闘争によって党から多数の除名者を出したのち、中共は一時整党工作を進め、積極的な建党工作进行を停止していたらしい。だが、1958年9月から党はふたたび大量の党員吸収運動を開始している。これは三面紅旗政策との関連をもつものとみられるが、広東省では1958年9～12月の4カ月間に11万0381人の新党員を獲得している<sup>(注67)</sup>。

現在の中共の建党政策にみられる傾向としてはその重点が地方におかれているため、地方小都市、農村では入党が比較的容易である反面、大都市および中央政府などの権力機関の内部では入党はきわめて厳格であるようである。ここでは党員は「大衆的」であるよりも「閉鎖的」な「特殊階級」を構成する。

### 3. 党歴による断層

第5表から明らかになることは、まず、1961年10月現在の党員1700万人の中で80%が中共政權成立後に入党しているということである。そして、1953年の第1次5カ年計画の開始から1956年の8全大会までの入党者が30%、8全大会以後の入党者が40%を占めている（この比率は後述するように疑問を生じさせるが、ここでは一応これに従って説明を進める）。20%以下の党員のみが革命戦争の経験を有し

第5表 中国共産党員党歴表

入 党 時 期	1950年7月	1956年9月	1961年10月
1945.3 以 前		10% (12~35)	20% (13~40)
1945. 4~49. 9		30% (8~11)	
1949.10~50. 6	40% (0~1)		
1950. 7~52.12		60% (0~7)	10% (10~12)
1953. 1~56. 8			30% (6~9)
1956. 9~61. 9			40% (0~5)

(注) かっこ内の数字は党歴を示す。

(出所) 『人民日報』1950年7月1日、1961年7月1日の劉少奇「40周年演説」、1961年10月17日『人民日報』社論、1956年9月中共8全大会に対する劉少奇の「政治報告」から作成。ただし、第7表の注で指摘するように、1961年10月現在の1949年10月以後の入党者の党歴別分類には相当の誤差があるとみられる。また各数値には前後で0.5%ずつ、つまり最大1%の誤差が考えられる。

第6表 ソ連共産党員党歴表(%)

	1952	1956	1961
10年以内	66	42	40
11~25年	29	51	52
25年以上	5	7	8

(出所) Merle Fainsod, *op. cit.*, p. 281.

ているにすぎない。つぎに、1956年9月現在では、新政権成立後の入党者が60%、1945年4月の7全大会以後つまり戦後内戦期入党者が30%、それ以前つまり抗日戦争期、江西ソビエト期の入党者が10%を占めていることになる。そして、1950年7月の新政権発足直後では、党歴1年未満の党員が40%を占めているのである。

第5表によれば、一般的傾向としては1961年10月現在中共党員の中で10年以内の党歴を有するものが、ほぼ70~80%を占めており、5年以内が約半数を占めているということがいえそうである。広東省の例をみると、1958年から1959年3月までに23万人の入党者があるが、この入党者数は1959年3月現在の省の総党員数約71万人の中で、党歴約1年の者が32.3%を占めていることを意味する(注68)。第6表に示されたソ連共産党の比率と比べて、中共党員の党歴の若さは対照的である。

これらの数字はまた、きわめて興味深い多くの事実を示している。つまり、(1)現在の党員の中では革命運動の経験者が相対的に少数者になっており、新党員は革命闘争の厳しい体験をもっておらず、党指導部との間に顕著な経験的断層が存在していること。(2)したがって、新党員は「革命家型」であるよりは、「新中国」の建設に貢献しようとする「官僚型」であるといえよう。(3)新党員はイデオロギー的動機よりも、新中国の「現実」に対する判断によってかれらの態度を決定するであろう。(4)劉少奇も指摘するように、「大量の新党員は、まだ十分にマルクス・レーニン主義的訓練を受けていないので、ともすれば主観主義、教条主義の立場となりかねない」(注69)し、同時にイデオロギーの儀式化、出世主義の手段化等の機会主義的傾向を発生させる可能性がある。(5)さらに、第5表と第4表をつかって党員数を逆算すると、1949年以後の整党運動によって相当数の党員が党から除名されていることが明らかとなる。中共の整風運動は毛沢東の「前を懲らして後を戒め、病を治して人を救う」という言葉に象徴される延安＝ゲリラ戦時代に形成された柔軟方式を特徴としているにもかかわらず、「社会主義建設の段階」に至っては、党内部の全体的な流動性はかなり激しいものであることが、うかがわれるのである。

#### 4. 党員の流動性

この点について、劉瀾濤は明確につぎのようにのべている。「過去10年間、全党は数回にわたる整党と整風運動を経て、社会主義と共産主義の教育を徹底的、系統的にすすめ、実際からかけはなれ、大衆から浮きあがった主観主義、セクト主義、官僚主義の作風をきびしく批判し、社会主義の事業を妨害し破壊するブルジョア思想に集中的に反対するとともに、党の路線、方針および政策にそむ

くすべての誤りに対して断固たる闘争をすすめ、同時にまた、党内にまぎれこんだ、万をもってかぞえる反革命分子、階級的異分子、ブルジョア右派分子、法律や規律にいちじるしく違反するもの、およびその他各種の悪質分子を、わが光栄ある共産党の陣列から追放した」(注70)。ではまず、第7表に基づいて党員の流動性をみよう。(1)1945年4月(7全大会)までの入党者についてみると、1945年4月現在の121万人は、1956年9月現在で107万人に減少している。11年間に14万人、11.5%が党籍を失っている。(2)1949年12月以前の入党者についてみると、49年12月現在の449万人は、1956年9月現在で429万人になり、7年間に20万人、4.4%が党籍を失っている。それが1961年10月現在では340万人になり、12年間に109万人、24%が党籍を失っているのである。さらにこれを段階的にみると、新政権成立以前の入党者は、最初の7年間に4.4%減り、つぎの5年つまり1956年9月～1961年という反右派闘争、反地方主義闘争、反右傾機會主義闘争の連続した厳しい段階では、1956年9月の数からさらに20.7%、89万人が党籍から消えていることになるのである。(3)1950年以後入党の党員については第7表の「注」において指摘するように、その基礎になっている分類数値が不正確で

あるように思えるのでその流動性についてはここでは論ずることは止める。ただ、1956年9月以後の入党者が最低57%はあるとすると、このBCDグループの流動性は非常に高いものであることが推定されるのである。しかも、周知のように、このグループは1950年代の整党運動、三反五反運動、反革命鎮圧運動、1955年4月からの肅反運動等の関門を経ているので、「解放」前入党者を20%とすれば、この57%という数字は大幅に増大する可能性がある。

以上の数字はもちろん今後さらに細かい検討を加えることを必要としているが、一般的な傾向としての党内の整党状況が明らかとなろう。この党籍離脱者の中には戦死、病死等の非政治的原因によるものも若干含まれていることは否定することはできないが、1945年以後の国共内戦から1952年の復興段階までの時期に入党した党員が、最も多く除名の対象となり、とくに、1956年以後になって大量に除名されているのはきわめて意味深いように思われる。これらの党員は、おそらく中共の中級幹部に属していたと思われる。鄧小平は1956年9月、「おおまかな統計によると県委員会の委員級以上に相当する幹部は全党に30余万人いるが、この30余万人の活動の良否が党の事業に決定的な影

第7表 中国共産党員入党時期別離党表

(単位: 万人)

入 党 時 期	元 の 数	1956年9月	減 少 数	比率(%)	期 間	1961年10月	減 少 数	比率(%)	期 間
1945年4月以前(A)	121	107	14	11.5	11年				
1949年12月以前(B)	449	429	20	4.4	7年	340	109	24	12年
1952年12月以前(C)	608					510	98	16.1	9年
1956年9月以前(D)	1,073					1,020	53	5	5年

(注) 本表によると(C)(D)グループの「減少数」は本来増加しなければならないにもかかわらず、(B)グループより減少しているということは、1961年10月17日、『人民日報』の報ずる党歴別分類そのものに誤差があるということであろう。いま、1950年以後の入党者に1人の離党者もいないとすると、1961年10月現在の減少数は依然として109万人である。したがって、1961年10月現在において1956年9月8全大会以後に入党したものは57%となる。また1961年10月現在の「解放」前入党者の比重を20%以上とみればこの数字は変わってくる。

(出所) 第4表および第5表により作成。

響を及ぼすのである」とのべているが、離党した89万人とこの30余万人はどのような関係に立っているのであろうか。

最後に、整党の具体的数量の例をあげてみよう。1954年4月2日『人民日報』の記事、「農村整党工作の経験」は、山東省で整党運動を行なった6万0360人の党员の中で、富農分子2363人を除名し、自動脱党と脱党勧告者は5892人、誤りを犯したもので処罰したものが1846名であったと報じている。整党対象6万0360人の党员の中で1万0101人すなわち16.6%が何らかの処分を受けている。1961年末ごろからは広東省で、「全省各地ではすべて前後して社会主義思想教育運動を展開している」<sup>(注71)</sup>が、同期の福建省連江県でも同じく農村で整風整社運動が行なわれている。連江県の人民公社における党员幹部の腐敗変質は、かなり深刻であるが、幹部の動揺状況を示す一例として、「同県の人民公社生産大隊における党と共産主義青年团支部の幹部240人の中で、172人、71%が“幹部”の地位を放棄することを申請している」<sup>(注72)</sup>という事実がある。人民公社の調整段階で多くの農村党幹部の政治的動揺と腐敗変質が批判の対象となっていることは『人民日報』(たとえば1963年1月11日)にも報じられており、いまや周知のところであろう。繰り返えされる中共内部の整党運動の波は、党员構成の流動性を抑制する方向には動いていないというべきであろう。

(注49) C. W. Cassinelli, “The Totalitarian Party”, *The Journal of Politics*, February 1962, p. 121.

(注50) Merle Fainsod, *op. cit.*, p. 253, p. 280. C. W. Cassinelli, *op. cit.*, p. 121. Georg Brunner, “Bylaws of the Elite: The Party Statute”, *Problems of Communism*, March-April, 1965, p. 48.

(注51) 劉少奇, 「中共八全大会に対する中央委員会の政治報告」, (1956年9月15日), 浅川, 尾崎編訳,

『劉少奇主要著作集』, 76ページ。

(注52) Merle Fainsod, *op. cit.*, p. 215.

(注53) 陳雲, 前掲論文, 81ページ。

(注54) 菊地昌典, 「スターリン批判と党風」, 『現代の理論』, 第9号, 1964年10月, 53ページ。

(注55) 鄧小平, 「党規約改正に関する報告」(1956年9月)。

(注56) 李維漢, 「人民民主統一戦線の強化と拡大について」, 『人民中国』, 1956年10月, 12ページ。

(注57) 安子文, 「培養革命接班人は党の一項戦略任務」, 『紅旗』, 1964年17・18期合刊。

(注58) C. W. Cassinelli, *op. cit.*, p. 126.

(注59) 「中央關於大量發展党的正確決定」。

(注60) 「中央政治局關於鞏固党的決定」。

(注61) 楊尚昆, 前掲論文。

(注62) 鄧小平, 「党規約改正に関する報告」。

毛沢東も, 「現在の情勢とわれわれの任務」(1947年12月25日)において, 「多くの地主, 富農やルンペン分子が機に乗じてわが党にまぎれこんだのがそれである。かれらは, 農村で党や政府や民衆団体のいくたの組織をにぎり, 横暴にふるまい, 人民をいじめ, 党の政策をゆがめ, これらの組織を大衆からうきあがらせ, 土地改革を徹底させないようにしている」とのべている。また, この点については「山西・綏遠区幹部会議での演説」(1948年4月1日)にも詳しく論じられている。

(注63) 中共中央, 「關於整党的指示」(1950年5月1日)。

(注64) 『人民日報』, 1950年7月1日, 社論。

(注65) 毛沢東, 「國家の財政經濟狀態の基本的転換のためにたたかえ」(1950年6月6日), 前掲『毛沢東戦後著作集』, 87ページ。

(注66) 『南方日報』, 1955年10月11日, 區夢覺, 「切實做好整党建党工作, 迎接農村社会主义革命運動高潮的到来」, および, 1954年5月13日『南方日報』の中共中央華南分局組織部部長李明「過渡時期華南党組織工作的任務」がこの点を論じている。

(注67) 香港, 『大公報』, 1959年1月12日。この数字の大きさを示すものは, 1955年5月12日『南方日報』の「中共中央華南分局召開華南組織工作會議確定今年組織工作任务」において「建党工作の方面において, 広東ではこの1年間に合計7万0936人の新党员を吸収した」という記事である。すなわち, 増加率でいえば1958年は1954年の約4.7倍ということであろう。

(注68) 『新中国年鑑』1961年、138ページ。J. W. Lewis, *op. cit.*, p. 114では74万人とされているが、年末であるか否かは不明。

(注69) 前掲『劉少奇主要著作集』第4巻、109ページ。

(注70) 劉瀾濤、前掲論文、292ページ。

(注71) 『南方日報』、1962年1月30日、社論。

(注72) 『今日大陸』、No. 213、4ページ。福建省連江県人民公社の整風整社問題にはきわめて重要な事実が発見されている。これに関しては、『今日大陸』、No. 208、212、230および『問題と研究』（国際関係研究所出版）第3巻第9期に詳しく論じられている。

## む す び

劉少奇は1945年に、党の各級指導機関を構成する党幹部問題の重要性をつぎのようにのべた。「党の幹部は党の指導の中核であり、中国革命の骨格である。幹部がいなければ、わが党の綱領や政策が大衆をつうじて遂行されることも不可能であるし、中国人民の解放事業が完成されることも不可能である」と。たしかに、われわれは歴史的現実として中国革命の勝利と社会主義建設の推進という事実を知っている。また、中国共産党の党の組織活動の柔軟性と有効性という優れた特質も知っているのである。しかし、また一方では中国共産党の指導の内的諸問題の存在を無視し、その党風を過度に理想化することも非現実的であるといわねばならない。むしろ、中国共産党自体は巨大な歴史的・全面的な変革運動を推進する主体として、その運動の過程で発生する深刻な組織的問題につねに苦しみ、その克服に努力している巨大な官僚制的集団であるというべきである。すでにみてきたように、延安時期前後から現代まで、党員幹部の問題は、その農民的性格、文化・思想・組織能力の水準の低さ、党員数の爆発的増加、そして交代による流動性、党歴の短縮化による未経験、

教育の不足等々によって発生するさまざまな不健全な組織的状况をいかにして克服するかという問題であった。

劉少奇は非プロレタリア的出身の新党員にとって「鍛錬」すなわち革命闘争、基層工作への下放と、「修養」すなわちマルクス・レーニン主義・毛沢東思想の学習が必要であるとのべてつぎのようにいっている。「われわれ共産党員はけっして天から降ってきたものではなく、中国の社会の中から生まれたものであり、党員はだれもかれも、みな中国のこの汚れた社会からでてきたものである」（1939年）と。元来「批判と自己批判」という党員教育の方法は、レーニン・スターリンによって中国共産党に輸入されたものである。だが、この方法を十分に活用したのはボルシェビキではなくて、中国共産党であった。ゲリラ戦争の拡大過程で急激に吸収された大量の農民党員を教育し、改造することは、党にとっては不可避的な要請であったのである。この場合、中国の儒教的伝統たとえば君子の内的修養というような概念がこれと結合され、中国共産党の独自の「整風」運動が生まれたのである。すでにのべたように、毛沢東は湖南農民運動の指導に際して、大衆への依拠こそ党の力の源泉であり基盤であると知ったのである。ここにかれの現代に至るまでの人力の重視、大衆路線の出発点がある。「整風運動」は毛沢東にとっては、「党内における大衆路線」の実現であるとすら考えられる。1941年の中共中央の「党性強化に関する決定」いらい、今日まで中共は何回の大小さまざまな「整風運動」を繰り返してきたことであろうか。中共の党史はこの意味では「永久的整風」の歴史といってもよいであろう。そして、この間に中共指導部によって指摘された党員幹部のさまざまな「誤った」思想と行動に対してはられたレ

ッテルもおそらくは数十種類にのぼるであろう。だが、問題は劉少奇自身もいうように、「何回となくくりかえされた克服工作ののうちでも、こうしたやり方はまた、ふたたび生まれてくるものである」（1950年4月29日、「北京メーデー講話」）。農民党員教育の問題についても毛沢東は、1947年12月に、延安の整風運動の成果をしめくくって、「だが、党の地方組織の面に、とくに党の農村基礎組織の面に存在する階級構成の不純と作風の不純という問題は、まだ解決されていない」（「現在の情勢とわれわれの任務」）とのべている。

中国共産党は現代中国の支配政党であり、社会主義革命という「上からの永久革命」の指導者である。党は常に新たな任務を提起し、また予測を越えた新たな客観的状況に対応していかなければならない。そして、これを可能にするものは党組織の一枚岩的団結と統一的行動であった。劉少奇は「民主集中制」という党の組織原則を「集中指導、分散的運営」という言葉で表現している。だが、この原則を均衡的に維持するということはあらゆる組織体にとっての永遠の課題である。中国のような広大な地域に、しかもコミュニケーション手段の後進性を前提とし、また、変転する党中央の「政治路線」のもとで、正確な組織活動を行なうことはきわめて大きな困難をとまなうであろう。そこには全体主義的な「運動政権」に固有な組織路線上の矛盾も不可避である。中国共産党の性格を人的構成の側面からみた場合には、党中央の設定する思想と行動様式のモデルと一般党員幹部の現実のそれとのあいだには、かなりのギャップが存在していることが感ぜられるのである。そして、1957年の反右派闘争以後、硬直化傾向をたどる中共のリーダーシップ、特に毛沢東個人崇拜の強化という状況のもとにおいては、整風運動は

ステレオタイプ化して、今日その「形骸」のみが存在しているともみられる。「説得」的方法に代わって、「力」による服従の方法がより多く使われる段階にさしかかっているのかもしれない。ソ連におけるスターリンの大粛清は、1936～38年に、つまり第1次5カ年計画が終わり、強制的な農業集団化が完了したあとに発生していることを思い起こすと、1960～61年ごろに、羅瑞卿（元公安部長、現総参謀長、党中央書記処員）をはじめとする多数の公安関係者が、党と政府のかなり高い地位に急速に昇進している事実は注目に値するものである。

（調査研究部東アジア調査室）